

## セバスティアーノ・ヴァッサリ『彗星の夜』： ディーノ・カンパーナの真実を語る

越 前 貴美子

### はじめに

フィレンツェから北東方向のエミリア・ロマーニャ州ファエンツァへ向かう街道沿いに、マッラーディという町がある。トスカーナの山間に位置するこの町は、2017年現在人口が3300人ほどの規模だが、1915年5月にイタリアがオーストリア・ハンガリー帝国に宣戦布告して第一次世界大戦に参戦した頃、人口は現在の3倍近くあり、それなりの賑わいを見せていた。王国が戦時下とはいえ、ここで人々は平時とさほど変わらぬ暮らしを続けることができた。この町を、1916年から翌年にかけて、作家であり活動家のシビッラ・アレラーモが、詩人ディーノ・カンパーナに会うため複数回訪ねている。

ふたりの馴れ初めは、1916年6月10日にアレラーモから送られた一通の手紙に始まった。それから約1年半、1918年1月にカンパーナが送った最後の手紙まで、ふたりが交わした書簡や電報の大部分が、1958年、アレラーモの許可のもと、1冊の書簡集として出版された<sup>(1)</sup>。後に、生前アレラーモが深く関わったイタリア共産党の活動家であったブルーナ・コンティ監修で『愛という名の旅 書簡 1916~1918年』(*Un viaggio chiamato amore Lettere 1916-1918*)と題され、現在に伝わる、書簡集の原形である。

本稿では、この書簡集をとっかかりにし、セバステアノー・ヴァッサリがカンパーナの生涯を語った『彗星の夜』(*La notte della cometa*) 執筆を巡る困難を見ることで、実在した人物や出来事を、虚構を交えて語ることの是非について論じる。

## 第1章—『愛という名の旅 書簡 1916～1918年』

### 1.1 シビッラ・アレラーモ

シビッラ・アレラーモ(本名マルタ・フェリチーナ・ファッチョ、愛称リーナ)が生まれた1876年頃、イタリアは統一後の経済的社会的な問題を多く抱えていた。2年間の義務教育が制定されたのは翌年のことで、イタリア人の識字率は20パーセント強であったと言われる。文学においてはフランスから新たなカノンが翻訳によってもたらされ、バルザック、ユゴー、フロベール、ボードレール、ゾラなどが知識人に読まれ始め、哲学においてはニーチェやフロイトが紹介された。また、イギリスをはじめとし、ドイツなどのフェミニスト運動に影響されたイタリア人女性たち(Cristina Trivulzio di Belgiojoso, Clara Carrara Spinelli, Anita Garibaldi, Giannina Milli など)が、女性の地位向上を目指す活動を始めた時期でもあった。

アレラーモは比較的恵まれた家庭に生まれたものの、母の精神的な病が一家に影を落とすなか、一方的にもたらされた望まない妊娠と結婚の末、離婚と親権剥奪を経験している。この時代には珍しくなかったこれらの状況を、しかしながら、アレラーモは自らの意志で打ち破り、変えて行った。そして、フェミニスト雑誌の編集を出発点に、作家活動と並行しながら識字率向上やイタリア南部における学校創設に尽力し、女性参政権獲得や売春への抗議活動を行った。私生活においては、文学関係者をはじめとする数多の著名人と浮名を流したことが知られている。当時スキャンダルとみなされたこの人目を惹く「身振り」は、自由を体現すべく生きたアレラーモ自身の選択であると同時に、時代

を先取りする女性を演じる必要性に迫られた結果でもある。フェミニスト活動家であり著名な作家である伝説化されたシビッラと、生身の人間リーナのあいだの乖離<sup>かいり</sup>を、作家のセバスティアノ・ヴァッサリ (Sebastiano Vassalli 1941-2015) は、自著『イタリア人』の「フェミニスト」と題した章で、「彼女が自身に抱いているイメージと、他者が彼女について抱くイメージのあいだの距離」(Vassalli2007: 106) と言い表し、その距離がもたらす彼女と他者の思いのすれ違いをユーモラスに語っている。アレラーモの場合、実は自身を広告塔としていたところもあり、自由奔放な女性を演じることに意識的であったと考えられよう<sup>(2)</sup>。

アレラーモの実像と伝説化されたイメージについては、彼女より40歳ほど若い文芸評論家作家のマリア・コルティが興味深いエピソードを残している。コルティは1948年に70歳を過ぎたアレラーモに会った際、その老いた姿に驚いたという。そしてその瞬間、コミュニストでありフェミニストであり、美しい女性であるアレラーモを思いはしたが、彼女が作家であることには思いが及ばなかったという。「私にも、彼女について人々が作り上げた人物像が優勢となったのだった」<sup>(3)</sup>とのコルティの言葉は、他者によって作り上げられたイメージに自身がからめとられていたことの衝撃を表している。

これらの事象を考慮すると、アレラーモには、周囲の人々によって作られたイメージを逆手に取るエネルギーがあったといえるが、作られたイメージを背負って生きることはそれほどたやすくはない。映画『愛という名の旅』(2002年)でアレラーモを演じたラウラ・モランテはインタビューで、「シビッラは弱い女性ではありませんが、今にも壊れそうな (fragile) 女性だと思います。彼女はふたつに引き裂かれています。感情的に苦悩を負って生きた女性と、もうひとりの、映画があえて語らない、社会的に大きな責務に縛られた女性とに。(…)一般的に言って、当時男性がシビッラのような自らの才能と闘う女性の芸術家を理解するのは、大変難しいことでした」<sup>(4)</sup>と述べている。

アレラーモは夫と子を後にして旅立つまでを語った最初の著作『ある女性』(*Una donna*)を1906年に出版した。これは自伝的な作品で湿った感情に満ちており、現代から見ると古臭いが、当時は画期的でスキャンダラスと捉えられた<sup>(5)</sup>。1919年には、カンパーナとの関係にも触れた『転変』(*Il passaggio*)を出版している。両作品ともに、アレラーモ自身が「人生を自作自演するモデル (*automodello esistenziale*)」であると意識して書いているのが透けて見える。自らを時代に先駆けた女性として位置づけ、そのモデルを体現する。アレラーモはそれをしてのけた。

## 1.2 ディーノ・カンパーナ

詩人ディーノ・カンパーナ (Dino Carlo Giuseppe Campana) は、1885年に恵まれた家庭の長男として生まれ、本人が認めているように幸せな子供時代を送った。ところが、弟のマンリオが生まれたあと、14歳の頃から母に疎まれ始めたのを境に、故郷のマッラーディで人々の偏見と意地悪にさらされ疎外された。唯一の詩集『オルフェウスの歌』(*Canti Orfici*)を1913年に28歳で書き上げ、翌春に自費出版している。出版に至るまでには、完成した原稿を他人に失くされ、記憶を辿って書き直すという受難を経ている。厳しい入学試験に合格して士官学校に入ったこともあったが、その後、多様な職業を転々とし、詩集出版後に発症した梅毒の影響から精神の均衡を失い、放浪生活を繰り返した。1918年以降14年にわたる入院生活の末、1932年、47歳のとき敗血症で亡くなった。

文学史上のカンパーナの地位は、現在では誰もが疑うことのない確固としたものだが、その評価は、詩人の生存中のみならず、死後も長いあいだ定まることがなかった。作家であり、カンパーナの研究者でもあるセバスティアノー・ヴァッサツリは、自ら監修を務めた『オルフェウスの歌』の前書きにこう記している。「20世紀の詩人のなかで最も読まれている詩人であるが、なかなか正

当な評価を与えられてこなかった。どの派にもどの傾向にも当てはめることの難しい詩人である。20世紀初頭のイタリアの詩人たちが必死で探求していたものを、カンパーナは苦もなくうたい上げたことで（実際、『オルフェウスの歌』は軽やかで、自然を内包している）、よけいにそっぽを向かれた<sup>(6)</sup>。さらに、「ディーノの詩を、唯一の詩集を、熱心に中傷した人がいた一方で、彼の作品をまったく解してもいないのに支持する人がいた。挙句の果てに、彼の墓は第二次大戦中に爆破さえされた<sup>(7)</sup>」と述べている。故郷の人々は彼を「狂人 pazzo」や「愚か者 scemo」と呼んで迫害し、巷では詩人としての彼を「詩人 = 狂人 = 天才 poeta-pazzo-genio」の図に当てはめる者までいて、カンパーナの詩の本質を曲解した。

『オルフェウスの歌』は、近年に至るまで数多くの版が出ており、よく言えば、詩人を敬愛する読者の多さがうかがえるが、他方で、本人による初版以降に出た版を検証すると、詩人が病院に収容され無力であったのをよいことに、詩や書簡が許可もなく編者の勝手な意図のもとにまとめられ、出版されていたことが明らかになる<sup>(8)</sup>。周囲の人間によって勝手に作り上げられたカンパーナ伝説が、人々の興味を否が応でも掻き立て、その興味を満たすかのような方法で詩人の作品が提示されてきたことの事実は重い。カンパーナの人生は、他者によって、彼の意志とは違う方向に向かわされたと言っても過言ではない。時代の寵児として自らそのイメージを負って生きたアレラーモと、自らの意志の外に追いやられて生きることしかできなかったカンパーナは、能動と受動という反対項でありながら、他者に翻弄されたという意味で共通するものがある。

### 1.3 『愛という名の旅』が辿った道

文芸評論家に読んでもらおうと、カンパーナが手稿をジョヴァンニ・パピニーニに託したところ、アルデンゴ・ソッフィチの手に渡った時点で紛失されてしまうという憂き目にあいながらも、記憶を辿って書き直された『オルフェウス

の歌』は、文学関係者のあいだで静かな評判を呼び、アレラーモもこの詩集を読んで、作者に賞賛の念を伝えたいと考えた。これがふたりの往復書簡の始まりである。1916年6月10日のことであった。

ところが、アレラーモからカンパーナへの最初の書簡と、それに対するカンパーナの返信は、現在市場で手に入るブルーナ・コンティ編集の『愛という名の旅』には収録されておらず、1959年にアレラーモの最後の恋人フランコ・マタコッタ<sup>(9)</sup>が『スッチェツ』11月号に載せた書簡集上で、マタコッタのシビッラへの批判（資料を思うように使わせてもらえなかった腹いせと考えられる）を含めて読めるのみである。すなわち、2通の書簡の現物は、マタコッタによって引用された<sup>(10)</sup>他は、現在も「マタコッタ文書」所蔵とされており、公開されていない。この背後には、マタコッタの狡猾で卑怯ともいえる資料の扱いがあった<sup>(11)</sup>。往復書簡が、『オルフェウスの歌』が作者以外の者に不適切な扱いを受けたのと似た扱いを受けていることは、まことに遺憾で、資料の適切な保管の重要性を改めて考えさせられる。

そもそもアレラーモは、カンパーナとの関係の証となる書簡を公開したがらず、ニコロ・ガッロ編集で、マリオ・ルーツイが前書きを担当するとの条件で出版許可を出したのは、亡くなるわずか2年前のことであった<sup>(12)</sup>。1958年のガッロ版以降、書簡集は1973年にエンリーコ・ファルクイによって2冊にわたるカンパーナの作品集に収められた<sup>(13)</sup>。さらに、1987年にブルーナ・コンティが、その後のカンパーナに関する研究と合わせて再版を出した<sup>(14)</sup>。その際、初版の編者ガッロの妻ディンダの協力を得て、失われた手紙や出来事のあいだの隙間を埋めるよう努めたという。ガッロ版と2000年のコンティによる最終版は、その間に行われた調査の結果を受け、手紙の日付の特定にわずかなずれが認められる。

アレラーモが1960年に亡くなる際、彼女所有のすべての資料（カンパーナの書簡などを含めて）をイタリア共産党に寄贈すると遺書に記された。現在、

それらはローマにあるグラムシ財団の「アレラーモ文書」で閲覧可能である。

#### 1.4 アレラーモとカンパーナの関係

カンパーナの詩集を読んで感銘を受けたアレラーモが初めて手紙を送ったとき、彼女は詩人が自分の『ある女性』を読んでいると信じていたが、実際には読んでいなかった。つまり、彼から彼女への興味は当初ほぼ何もなかったと考えられる。しかも、当時アレラーモはすでに40歳で名の知れた作家であったのに対して、カンパーナは31歳のほとんど無名の詩人で、故郷で細々と生きていた彼に、アレラーモの賞賛の手紙は驚きであった。

ふたりの関係については、アレラーモがカンパーナを破滅に追いやったとしばしば非難されてきた。確かに、名声を確立した作家であり年も多い彼女は、文学者をはじめとする数多の著名人との浮名で知られており、それに比して彼は初心であったといえよう。だが、最初に示した困惑ともとれる反応のあと、カンパーナは彼女への対応においてじゅうぶんに冷静であり、照れ隠しのフランス語使用やユーモアあふれる言葉には余裕さえ感じられる。実際、資料が明らかにするところによれば、ふたりのやりとりは友愛に満ちていて、最初はアレラーモに押され気味のカンパーナも、彼女の情熱的な賞賛をうまくかわしつつ徐々に心を開き、互いのあいだに信頼関係が築かれていく。アレラーモが初めてカンパーナを訪ねて行った8月3日後はふたりの関係も親密となり、彼から返信がこないと彼女の執拗な呼びかけが続くものの、カンパーナの書簡は常に明晰さと落ち着きにあふれている。

また、カンパーナは文学関係者に知り合いが多いアレラーモに詩集の宣伝を頼んだり、フィレンツェのフランス文化会館から来る翻訳の仕事に分けてもらったりしており、彼女は彼が精神的な平衡を崩すと優秀な医師を紹介し、友人知人に助けを乞い、各地を放浪する彼の滞在先を見つけたり、刑務所へ彼を訪問したりしている。最初の書簡交換から半年ほどたった12月にカンパーナ

が激情を爆発させた再会のあと、文芸評論家エミーリオ・チェッキの妻であり親友のレオネッタに書いた手紙の中で、アレラーモは自分のカンパーナに対する愛がいかなる性質のものかようやくわかったことを彼に伝えてほしいと、レオネッタにこう頼んでいる。「これほどまで自分の生をすべてかけて関わったことはなかった。それは熱愛であり、私の服従であり完璧な自己否定だった…。もはやこれ以上どう愛せばよいのかわからない」<sup>(15)</sup>と。アレラーモ側の献身については、カンパーナのいとこピエトロ・カッペッリが、「私はここマツラーデイで何度か彼女に会ったことがあります。(…) ディーノは彼女が大好きなようでした。彼女は従順で、ちょうど従卒が士官に仕えるかのようにディーノに従っていました」<sup>(16)</sup>と証言を残している。

ところが、最初はいわゆるやきもちであった感情が執拗な嫉妬に変わり、メロドラマ的な感情のもつれへと移行し、カンパーナの病が原因の暴力的な激情の爆発が増えてくるまでに、それほど時間はかからなかった。そのような状況下で、アレラーモは辛抱強くカンパーナを励まし、苦しみを共有し、何度も二度と手紙を書かない、二度と会わないと言いながら、「もう一度始めよう」「戦争が終わったらフランスへ行って暮らそう」と母のように励ましている。カンパーナを見捨てられないが故のアレラーモのこの執拗なとりなしには、彼女の母が精神を病んで晩年を病院で過ごして亡くなった無念さが影を落としていると一般的に考えられているが、カンパーナの側にも言い分はあり、アレラーモを、自分を理解してくれる存在としながらも、彼女が関わってくることで激情に飲まれて生きるのは御免だと思っていたふしもある。ふたりの関係が破綻した後、彼は、「これ以上私を苦しませないでくれ。もう私を小説の人物に仕立て上げないでくれ…」<sup>(17)</sup> (Voi non mi farete più soffrire, non mi romanze[re]te più,...)と彼女に宛てて書いている。ここで注目したいのは、カンパーナが使用している romanzare という言葉である。二人の人間によって成立する往復書簡を読む際に、読者は一方の人間に肩入れしないで読むことが必要である

が、アレラーモとカンパーナの関係においては、カンパーナが病に侵されていたこと、社会的にもマージナルな存在であったことを少なくとも念頭に置いて読まなければならないだろう。ここでカンパーナが使用した *romanzare* という動詞は、「事実や実際に生きた人間を、空想で自由に細部を加えつつ念入りに組み立てる」ことであり、「美化、装飾、彩色、誇張」もその一環である。アレラーモの「身振り」が往復書簡においても自作自演的であり、カンパーナにもそれを押し付けていたとしたら、彼にとっては負担であり、迷惑以外の何ものでもなかったであろうが、ここでは、社会的弱者であるカンパーナが *romanzare* されていると感じた事実だけを念頭に置いておこう。

## 第2章—『彗星の夜』 (*La notte della cometa*)

### 2.1 セバスティアーノ・ヴァッサリ 『彗星の夜』

ヴァッサリは早い時期に『オルフェウスの歌』を読んでいたという。巷では「詩人＝狂人」神話が幅を利かせていたが、そんな話は信じたこともなかったと述べている<sup>(18)</sup>。彼が後に『彗星の夜』と題するカンパーナについての作品を書いたのは、モンダドーリ出版社の編集者ジュリオ・ボッラーティに司法問題を扱う叢書への執筆を依頼されたためであった。そこで、詩人が精神病院に収容されたことに関する司法上の一部始終を書くことにした<sup>(19)</sup>。その工作中、カンパーナが国外で逮捕され病院に収容されたとされる事実関係を明らかにしようと、編集者が各国のイタリア文化会館を通して調査を行ったところ、詩人が外地に赴いて逮捕され病院に収容されたと長い間みなされてきたブエノスアイレス、モンテヴィデオ、ブリュッセル、ベルン各地について、南米は資料不明であったが、ベルギーとスイスは、刑務所に入れられた記録がないと判明した<sup>(20)</sup>。逆に、カルロ・パリアーニ医師がカンパーナの狂気と才能のつながりをこじつける目的で書いた書物<sup>(21)</sup>では、実際に収容されたジェノヴァの刑務所のことには触れられていないことがわかった。さらに、カンパーナが精神の病の

ために兵役につくことができなかつたとされていた点も、フィレンツェの古文書館所蔵国王軍記録簿上で間違いであることが明らかになったという。

事実の隠蔽<sup>いんぺい</sup>は、さまざまな理由でなされる。カンパーナの場合は、まず家族（主に母と弟）によってなされた。ヴァッサリが「家族主義 *familismo*」という言葉で表した、家族の名誉を守るための、都合の悪い事実の隠蔽<sup>いんぺい</sup>である。さらに、カンパーナの故郷マッラーディの「名士たち」によって。マッラーディの町役場では、ヴァッサリが本執筆の事実確認で出向いた際、「マッラーディがゴシック線上<sup>22</sup>にあったため、文書は第二次大戦中にすべて破棄されてしまった」と言われて閲覧できなかつた資料が、『彗星の夜』出版直後に出て来た<sup>23</sup>。ヴァッサリは本の末尾で述べている。「でたらめでありながら堅固な話というものがあって、それを繰り返すだけでじゅうぶんなのだ。ディーノが生まれつき狂人だったと繰り返すだけでじゅうぶんなのだ。(…)彼は馬鹿者で、狂気が彼を偉大な詩人にした。ヒステリックな母もモデナの兵学校も存在などしていない。梅毒、そんな恐ろしいものはあつたためしがない。(しかも、我々が言うことが真実であろうと虚偽であろうと、「狂つた詩人」の物語がみんな好きで、興味を引くのだ…)」。「ディーノは公認の狂人で、逆のことを言う者もまた、月に向かって吠える狂人なのだ」と。こうして、モンダドーリの企画で始めた仕事のはずが、ヴァッサリは「不愉快な出来事」のために、『彗星の夜』以降もカンパーナの真実探求に関わり続けることとなった。

## 2.2 『マッラーディのクリスマスーディーノ・カンパーナの最後のクリスマス』 (*Natale a Marradi L'ultimo Natale di Dino Campana*)

カンパーナの生涯が語られる『彗星の夜』(1984年)において、詩人とアレラーモとの一部始終はテキストの一部をなしているに過ぎず、作者は当然カンパーナの側に立って書いている。従って、詩人のアレラーモへの気持ちも、「ディーノは恋愛のことは考えていなかった。彼より年上だがまだきれいで相

手になる女性と冒険することしか考えていなかった」と要約され、「ディーノはシビッラに本当の興味を抱くなど思いもよらなかったし、彼女に恋するなど決して考えなかった」<sup>(24)</sup>と断定し、詩人にとってのアレラーモを「気に入った女性で、つべこべ言わずに身を任せてくれる」存在と冷ややかに位置付けている。

ところがヴァッサッリは、第2版（1990年）後の第3版（2010年）に「結びの言葉」（Congedo）を追加し、そのなかで、第3版を最終版とすること、この最終版にはカンパーナの物語のみならず、物語を語る本の話も含みたかったとして、独立した形で『マッラーディのクリスマスーディーノ・カンパーナの最後のクリスマス』を収録した。

1916年のクリスマスにアレラーモがカンパーナの故郷を訪ねたことは、書簡のみならずカンパーナの親戚者の証言によっても立証されている<sup>(25)</sup>。初めての訪問がいつで、何度訪れているのかは明らかではないが、すでにふたりの間に友愛が芽生えた7月末に、アレラーモがマッラーディで会うことを提案し<sup>(26)</sup>、その返信でカンパーナは具体的な行程を示しながら、「マッラーディは私が大変つらい思いをした故郷で、私の血がわずかにあの高みの岩壁に今もこびりついています」<sup>(27)</sup>と胸の内を吐露している。町の人から、それどころか母親から厄介者とされて生きたカンパーナが、唯一の女性理解者であるアレラーモに故郷を見せることには、彼女を最愛の女性とみなしていたかどうかの問題とは別の、深い意味があったと考えられる。

ところで、『彗星の夜』の冒頭で、ヴァッサッリはそのマッラーディを1983年9月に訪れたことになっており、ふたりが過ごした宿 Albergo Lamone の窓から外を見ながら、上記のカンパーナの言葉を思い出し、こうつぶやく。「実のところ私は、マッラーディに何を探しに来たのかわからない。ここには書類も資料もない。すべて第二次大戦中に破棄されてしまったのだ<sup>(28)</sup>。私がここまで来たのは、ディーノが愛した場所を見て、岩間にあの血を探すためだったの

だろう」<sup>(29)</sup>。そして作品末尾には、立ち上がって窓を閉める身振りを書き込んでいる<sup>(30)</sup>。ここで作家は、本執筆に際して必要な資料が得られないことで、カンパーナの生涯の隙間を埋めることができない無念を述べているのだが、この言葉は6年後に発表した別の作品に繋がっている。

1984年11月の『彗星の夜』出版後の1990年に、ヴァッサリは『キメーラ』の出版に臨んで、数奇な運命をたどったアントニアの物語の冒頭に、この話を書くことにしたいきさつを記している。そのいきさつはこう始まる。「この家<sup>(31)</sup>の窓からは何も見えない。(…)この窓の、この無の前で、よくふとザルディーノ<sup>(32)</sup>のことを考えた。下方に見えるあの村々に似た、わずかに左手の、二つ目の陸橋を少し超えたあたりの村。ヨーロッパのこの地方でもっとも大きく荘厳な山、モンテ・ローザの麓の。(…)「白い岩壁」と、20世紀初頭にわが並はずれた親父である詩人ディーノ・カンパーナが呼んだ山〈…〉」<sup>(33)</sup>。そして、「もうだいたい前から、私はこの話に光をあてようと考えていた。4月の太陽が平原とモンテ・ローザの絵葉書を取り出させるように、語ることで無から引出したいと。これらの場所を、アントニアが生きた世界を、語りたいとまた思ったのだ。だが、そうすると必ず、我々の世界からアントニアの世界の距離や、その距離を包む忘却によって気持ちにくじかれるのだった」<sup>(34)</sup>。つまりここで読者は、作家の『彗星の夜』執筆の経験が、『キメーラ』執筆に繋がっていることを解する。「私は自問したものだった。もはや現在に属さない現在を理解する手助けをしてくれるのは何かと。しばらくして私はわかった…。この風景を、この無を見ながら、現在には語られるに値することなどないと。現在は雑音だ。多くの無数の声あらゆる言語で一度に声を張り上げ、「私が」「私が」「私が」と、互いの声をかき消そうとしている。現在の鍵を探すには、現在を理解するには、雑音の外に出る必要がある。すなわち、夜の底まで、あるいは無の向こうまで行く必要がある。もしかすると、あちらに、少し左手の、二つ目の陸橋の少し向こうまで、今日は見えない「白い岩壁」の麓まで。アン

トニアの物語のなかの、まぼろしのザルディーノの村の」<sup>(35)</sup>。

### 第3章 真実を語ること

#### 3.1 『彗星の夜』の文学ジャンル

ヴァッサッリは、『彗星の夜』の執筆中と出版後に「多くの不愉快な出来事」を経験した。それは、資料の出し惜しみであったり、家族からの名誉棄損の訴えであったり、カンパーナの生涯を理解するにあたって影響のない、取るに足らぬ間違いの論<sup>あげつら</sup>いであったりと、テキストに書き込まれた内容によって都合の悪い思いをする（した）者たち、あるいは、単に上げ足を取る者たちによってなされたことは上述した。つまり作家は、詩人の生涯を語ることで、詩人にまつわるとごたごたをも引き受けたことになる。しかしヴァッサッリは、この種のごたごたも想定内のこととして先回りしてテキスト最終ページに書き込んでいる。「それに、きちんとっておかなければならないはずのことだが、私は自分を評伝の書き手（biografo）とは思っていないし、詩人であってもなくても評伝（biografia）を書くことは決まっていだろう。私はいくらか特徴ある人物を探求し、偶然によってその人物を過去の現実に見出し、そこから外へ引き出した。がむしゃらに、几帳面に、真実の精神をもって」<sup>(36)</sup>。ここで、作者は『彗星の夜』をいわゆる評伝<sup>(37)</sup>ではないと位置付けることによって、テキスト内の物事への批判を予め<sup>かわ</sup>躲している。

ヴァッサッリはカンパーナの生涯を、官公庁の古文書、新聞記事や病院に残された資料、証言、調査結果、カンパーナが書き残した詩・散文・書簡、カンパーナに送られた書簡などから得られた事実をもとに、それをおおよその時系列に沿って再構築して語っている。しかし、詩人の生涯をくまなく真実に近づけて語るには限界があり、隙間を埋めるために想像力を駆使し、推測し、しばしば詩人の生にその詩を重ねつつ語ってもいる。その過程にはヴァッサッリの詩人への敬意など個人的評価もうかがえる。つまり『彗星の夜』には、伝記的、

評伝的のみならず、小説的側面が認められる。

さらにテキストには、冒頭と末尾に作者に限りなく近い「私」がマッラーディの宿の窓から外を眺める場面が置かれ、語られる話を入れ子状に包み込むことで、「私」が紡ぐ物語であることが強調されている。

具体的な語りの例としては、事実の提示がかなわない場合の、内容の保証を回避するかのような「小説的仮説に従って (48)」<sup>38)</sup>や「容易に～と想像できる (52)」という表現や、「さて、失われた出来事の一部でも取り戻すために遡ってみよう (87)」、「ディーノと共にイーモラの精神病院に入ってみよう (95)」という、1人称複数を用いた読者を巻き込む物言いや、「寒さに凍え空腹を抱えてディーノはマッラーディに戻る (167)」、「1916年6月24日土曜日、午前8時過ぎ、ディーノはまだ寝ているが、郵便配達人が彼を起こす (191)」という、史実に基づきつつも小説的な表現や、「春がコーヒーのようにディーノを刺激する (65)」という詩的表現までさまざまに挙げられる。

以上のことを考慮すると、『彗星の夜』は評伝的な小説と位置付けられるだろうか<sup>39)</sup>。そうだとすれば、この作品を書いたヴァッサリが、内容について「不愉快な出来事」を経験する謂れなどないのではないか。『彗星の夜』の6年後、作家が「我々の世界からアントニアの世界への距離や、その距離を包む忘却によって気持ちをくじかれ」ながら、さらに『キメーラ』を書いたのには、作家の、語ることへの強い信念が見て取れる。

### 3.2 真実を語ること

過去の物事を語る際に必ずといってよいほど問題になるのが、語られた内容が真実かどうかということだろう。ヴァッサリの『彗星の夜』出版に際して、語られた内容によって都合の悪い思いをする者たちが、作品の信憑性を揺るがそうと立ち働いたのは、まさにこの問題を逆手にとってのことである。しかし、それ自体に恣意的な再構築の作業が含まれる語りの性質上、信憑性のレベルに

違いはあっても、真実を云々することにはそもそも無理がある。そこで浮上してくるのが、過去を語る場でのフィクションの度合いと質の問題である。真実に沿って語るべき事実、それ自体逆のベクトルともいえる創作によるデータが混在し、時には、レトリックで武装した証言や一人称による告発まで対峙するわけであるから、語りの全体が醸し出す結果は、ことによるとエンターテインメントを目的としたファンタジー盛りだくさんの歴史小説にもなり得る。

17世紀前半のロンバルディアの物語『いいなずけ』（初版1827年）を書いたマンゾーニは、『いいなずけ』以後、小説や詩を書くのに必要な想像力に信頼をおけなくなり、ほとんど文学作品を書かなくなったと言われている。歴史上の出来事や人物を表象することに関する議論は、このように近年に始まったことではない。1980年代から1990年代にかけてウンベルト・エーコをはじめとする作家による歴史小説（romanzo storico）が隆盛を極めた折にも、イタリアで、その波に乗るかのようにエンターテインメントとして書かれた作品群に批判が寄せられたのをきっかけに、1800年代の歴史小説の伝統に代わる、新しい〈歴史—文学〉の関係が議論された<sup>(40)</sup>。当時の状況について現代歴史小説の研究を専門とするクラウディア・カーオは、新たな歴史表象の傾向をこう分析する。「リアルであることへの感覚は徐々に失われてしまった。なぜなら、リアルであること自体が再形成され、イメージに翻訳され、情報とエンターテインメントの差異がもはや可能にならない地平に移行されたからである」。これは、我々が大衆社会のなかで記憶喪失にも似た非個人化を運命づけられていることを言い表しているのだが、このような状況において、「リアリティとリアリティをそのまま紹介する可能性に過度の信頼をおくことは危険である」と警告する。というのも、「歴史を語る（raccontare una storia）とは、それを構築すること、際立った出来事を選択すること、登場人物を紹介し、取り巻く状況と理由を探ることであり、客観的にはなり得ないからである」。そして、「一般的に、文学におけるリアリティとは、むしろリアリティの〈感覚的效果〉である」

と述べている<sup>(41)</sup>。

この「感覚的効果」とは、すなわち、リアリティそのものでは決してなく、語られる総体のなかから読者が読み取る何かであって、この効果を産み出すための装置がフィクションである。フィクションは現実と結びついていなければ偽物を引き起こすが、現実と結びついた場合、書物と読者の間に幸いなコミュニケーションをもたらす。

『彗星の夜』において作者が「生存中にその時々場所を与えられなかった (non storicizzato in vita)» ひとりの人間の行程を再構築している」としたジョヴァンニ・テジオの評価<sup>(42)</sup>は的確である。通常、私たちはこの世界に場所を与えられて (storicizzare)<sup>(43)</sup> 生きている。それなのに、周りの人間から人生を勝手に歪曲され (romanzare)、きちんと場所を与えられる (storicizzare) ことのなかったディーノ・カンパーナというひとりの人間の生を、ヴァッサリはフィクションを用いて語ること (storicizzare) でこの世に繋ぎ止めた。

## おわりに

『彗星の夜』のカンパーナも、いわれのない罪で魔女裁判にかけられ処刑された『キメーラ』のアントニアも、時代は違いこそすれ、周囲の者や時代に翻弄され、生を与えられたこの世に当然与えられるべき居場所を与えられなかった。そんなカンパーナに、ヴァッサリは、『彗星の夜』の末尾に『マッターディのクリスマス』を添えることで、彼を理解する人物 (シビッラ・アレラーモ) がいたこと、その人物と幸せを分かち合う瞬間があったことを書きこんだ。

この『マッターディのクリスマス』の末尾を、作者は、最後のクリスマスで病院で過ごすカンパーナの姿という突飛とも思われるようなファンタジーあふれるエピソードで締めくくっている。ここに真実を読み取るかどうかは、読者次第である。

ディーノも作成に加わった病院のプレゼピオの山々は、マッラーディの山々だ。その洞窟にはマリアとジュゼッペ、雄牛やロバ、そして神の御子がいる。ディーノは御子を手に取る。それを見た看護師は止めようとして、その必要はないと気づく。ディーノは裸で顔色のいい御子を見て、「僕だ」と言って微笑む。ディーノと御子は微笑みを交わす。「彼らは病院のなかの世界に到来した。ところがまだ自分に何が起こるのか知らない。迫害されることも嘲笑されることも。健常者と狂人の無関心のなかで、カステル・プルチで亡くなることも知らずに、微笑を交わす。人間の生は、一度歪み始めると、神でさえまっすぐにはできない」<sup>(4)</sup>。

## 注

- (1) *Campana Aleramo Lettere, Vallecchi, Firenze, 1958*
- (2) Cft. Vassalli (2007: 106) 「シピッラは、自らの振舞や著書が20世紀初頭のイタリアのような閉じた片田舎然とした環境に引き起こしたスキャンダルに、意識的であった」
- (3) prefazione di Maria Corti in *Una donna* di Sibilla Aleramo, Feltrinelli, Roma, 1950/1997, p. VIII
- (4) *Placido difende il suo film "Volevo raccontare una passione"*, in *La Repubblica* 04/09/2002
- (5) 当時、『ある女性』を論じた書評のタイトル「シピッラの愛」、「告白する女」、「お嬢さんには不適切」、「情熱の書」、「美しきブロンドの野獣」は、20世紀初頭に女性が奔放に生きることの難しさを浮き彫りにしている。
- (6) Prefazione di *Canti Orfici*, RCS Quotidiani, Milano, 2004
- (7) 墓があった教会ごとドイツ兵によって爆破された。
- (8) 『オルフェウスの歌』の主要な版については、林直美『La Chimeraをめぐって—カンパーナからヴァッサリへ』を参照されたい。
- (9) Franco Matacotta (1916-1978): 詩人、ジャーナリスト、イタリア語教師。アレラーモと彼女より40歳年下のマタコッタの関係は10年にわたって続き、1947年に彼の結婚で終わったが、その後もアレラーモは彼の研究に自らが所有する資料を貸与し、マタコッタはそれらを文字通り利用した。1958年にニコロ・ガッロによる版が出る

前の1949年には、アレラーモに無断で彼女所有のカンパーナの詩や散文を集めた小冊子を出版している。

- (10) In *Corrispondenti di Dino Campana*, "La Fiera Letteraria", a. IV, n.31, luglio 1949, p. 3
- (11) マタコッタの狡猾で卑怯ともいえる資料の扱いは、グラムシ財団のアレラーモ文書館内に残るマタコッタとアレラーモ間の書簡に明らかである。それは、1935年当時大学生の彼の甘言たっぷりな手紙に始まり、彼がカンパーナの手稿を無断で利用するために手を尽くした内容の手紙を経て、1959年にアレラーモが彼のやり方を厳しく弾劾した手紙に至るまで保管されている。
- (12) 「昨日、ニコロ・ガッロがここに来て、いくつかのことを解明しようと、カンパーナの手紙を写していた。そうはいっても、私はまだ手紙の出版に応じるかどうかわからない。手紙を再び読むと（私の手紙もだ。それにしてもどうして私の手紙が手元に戻って来たのか覚えていない）、とても困惑した。おそらく1年にわたるあの愛が、人生で最も濃密で酷かったから、それを洗いざらい語るができなかったのだ。書かれた3つの詩は、今もわが心の、あの大きな炎上の証言であり続けている」（antes: 102-3）。アレラーモ所有であった手紙のうちどれだけが失われたのか、アレラーモによって書かれたものの送られなかった手紙があったのか、書簡集から省かれたものがあったのかなどは明らかでない。
- ガッロ版：Dino Campana-Sibilla Aleramo *Lettere*, a cura di Nicolò Gallo, Vallecchi, Firenze, 1958
- (13) *Campana Opere e contribute*, 2 volumi a cura di Enrico Falqui, Vallecchi, Firenze, 1973
- (14) *Quel viaggio chiamato amore Lettere*, a cura di Bruna Contli, Editori Riuniti, Roma, 1987
- (15) *Viaggio2015*: LXVI 21/12/1916
- (16) *Viaggio2015*: LXVII 24/12/16 の注
- (17) *Viaggio2015*: CIII 27/08/1917（下線は当稿筆者による）
- (18) *Cometa2010*: 246
- (19) *Cometa2010*: 251-3
- (20) 国内パルマでの刑務所収容がなかったのと同じ。
- (21) *Vite non romanizzate di Dino Campana scrittore e di Evaristo Boncinelli scultore*, Vallecchi, Firenze, 1938（このタイトルにも romanzare という動詞が使われている。この場合、non という否定辞を付けて、小説化していないことを、すなわち真実であ

- ることさら強調している)
- (22) 1944年6月のローマ陥落後、ドイツ軍がイタリア中部に敷き直した4重の防衛線のひとつ。
- (23) ヴァッサツリは、「カンパーナを真実のもとに取り戻し、彼の生前没後にわたって縫い付けられた伝説から引き出す試みは、多くの不愉快な出来事を産み出した」と述べている。本が出版されると、詩人の弟マンリオから「カンパーナ家から梅毒患者は出ていない」として名誉棄損で訴えられ（梅毒の事実は医療的見地から証明されている）、国内の有力紙には書籍上の取るに足らない間違いの一覧を載せられ、文学賞を取った式典でいやがらせを受けた。(Cometa2010: 267) なお『彗星の夜』出版直後に市庁舎から出て来た資料の一部は、Cacho Millet によって *Campana fuorilegge* として出版された。
- (24) Cometa2010: 199
- (25) 1916年12月24日書簡A→C (*Viaggio*2015: 92)、12月24日書簡への注（ディーノのいとこの証言）(p. 93)、1917年6月20日書簡A→C (*Viaggio*2015: 117)
- (26) *Viaggio*2015: V
- (27) *Viaggio*2015: VI
- (28) 執筆のための資料を求めて町役場を訪れたヴァッサツリに、担当者が「第二次大戦中にマッラーディがゴシック線にあったため資料はすべて破棄された」と言って、実際はあった資料を故意に見せてくれなかったエピソードが『マッラーディのクリスマス』で紹介されている (263)。
- (29) Cometa2015: 5 ヴァッサツリのテキスト引用中の下線は当稿筆者による。
- (30) Cometa2015: 234
- (31) 物語の内包的作者であるヴァッサツリはノヴァーラにいる。
- (32) 『キメーラ』舞台の村
- (33) *Chimera*2017: 10
- (34) *Chimera*2017: 11
- (35) *Chimera*2017: 12
- (36) Cometa2010: 238
- (37) 評伝とは、人物評を交えた伝記のことで、人物についての研究や批評の分析判断に重きがおかれる。英語の *critical biography* がこれにあたる。
- (38) 括弧内の数字は頁数を示す。以下同様。
- (39) カンパーナが生前に出版した詩や散文をヴァッサツリが編集した *Un po' del mio sangue. Canti Orfici, Poesie sparse, Canto proletario italo-francese, Lettere (1910-*

1931)の注釈に、Giovanni Tesioは書いている。「ヴァッサリはカンパーナを真実あるいは真実を語ることの表現へと再び導こうと努めた。決して伝説ではなく。ヴァッサリの作品は、文字通りの意味でも語源的な意味でも、カンパーナの人生を書いたもの、つまり彼の一代記だ。彼の人生にあったすべてのものが作品の中にある。ヴァッサリは、ときには自身の推測で補完しつつ、「生存中にその時々場所を与えられなかった non storicizzato in vita」ひとりの人間の行程を再構築している」。

- (40) この議論に関しては、その軸となった Remo Ceserani の論文、Paolo d'Angelo や Claudia Cao らによる論文を参照。
- (41) Claudia Cao, “*Sul ruolo della scrittura nel romanzo neostorico italiano*”
- (42) 注(39)を参照のこと。
- (43) storicizzare=rapportare, inserire qualcosa in un preciso ambito storico  
storicizzare とは「物事を歴史上の正確な場に位置づけること」であり、語源的には当然のように storia「歴史、物語」が含まれている。つまり、物語ることなくして storicizzare することはかなわない。
- (44) *Cometa*2010: 277 括弧内は原文の訳であり、それ以外は筆者の要約である。

## 文献一覧

### テキスト

Aleramo S. e Campana D.

2005, *Un viaggio chiamato amore Lettere 1916-1918*, a cura di Bruna Conti, Milano, Feltrinelli

Campana D.

2004 *Canti Orfici*, edizione speciale per il Corriere della Sera, Milano

Vassalli S.

2016 *La Chimera*, Milano, Rizzoli

2010 *La notte della cometa*, Nuova edizione con il racconto *Natale a Marradi*, Torino, Einaudi

2008 *Natale a Marradi—L'ultimo Natale di Dino Campana*, in «Nativitas n.50», Novara, Interlinea

### 欧文引用文献

Aleramo S.

1997 *Una donna*, Milano, Feltrinelli.

1921 *Il passaggio*, Firenze, S.L. Bemporad.

Conti B e Morino A. (a cura di)

1981 *Sibilla Aleramo e il suo tempo—Vita raccontata e illustrata*, Milano, Feltrinelli.

Antes M.

2010 *Amo, dunque sono—Sibilla Aleramo, pioniera del femminismo in Italia*, in *Italianistica del mondo*, Il serie/04, Firenze, Mauro Pagliani Editore.

Cao C.

2015 *Sul ruolo della scrittura nel romanzo neostorico italiano*, Between, V10. *L'immaginario politico. Impegno, resistenza, ideologia*, Eds. S. Albertazzi, 1-5.

Ceserani R.

1991 *Cinque domande sul ritorno al passato*, in *Tirature*, ed. da Vittorio Spinazzola, Torino, Einaudi, 25-36.

D'Angelo P.

2013 *Verità e finzione nella narrativa contemporanea*, pubblicata da Le Parole e le Cose, 11 giugno.

2013 *Le nevrosi di Marradi—Quando la storia uccise la poesia*, Bologna, Il Mulino.

Millet C.

1985 *Campana fuorilegge*, Firenze, Vallecchi.

Pariani C.

1938 *Vite non romanzate di Dino Campana scrittore e di Evaristo Boncinelli scultore*, Firenze, Vallecchi.

Placido M., Morante L., Accorsi S.

*Michele Placido difende il suo film “Volevo raccontare una passione”*, in *La Repubblica*, 04/09/2002

Tabucchi A.

1991 *Vagabondaggio*, in *Il gioco del rovescio*, Milano, Feltrinelli.

Vassalli S.

1989 *Introduzione e Cronologia della vita dell'Autore*, in *Opere. Canti Orfici. Versi e Scritti sparsi pubblicati in vita. Inediti*, a cura di, Milano, TEA, I-XXVIII

2003 *Campana, la chimera del poeta maledetto*, in *Corriere della Sera*, Milano, 26/11

2004 *Bibliografia essenziale* in “Nota Bio-Bibliografica”, in *Canti Orfici*, edizione speciale per il Corriere della Sera, Milano.

2005 *Introduzione* in *Un po' del mio sangue—Canti Orfici, Poesie sparse, Canto proletario italo-francese, Lettere (1910-1931)*, a cura di, Milano, Rizzoli.

2007 *La femminista*, in *L'italiano*, Torino, Einaudi.

和文引用文献

林直美 『La Chimera をめぐって—カンパーナからヴァッサリへ』

『和田忠彦先生還暦記念論文集』 土肥秀行、橋本勝雄、住岳夫編、双文社印刷、2012年  
*Per i sessant'anni del professor Tadahiko Wada*, a cura di Hideyuki Doi, Katsuo Hashimoto e Takeo Sumi, Sôbunsha, 2012

<http://www.ritsumei.ac.jp/~hidedoi/wada2012.html>